

『アドヴァンス・サロン』一九八二年四月（ADE研究会）

教育問題の基底を考える

教科書問題とは何なのか

矢口 新

この頃何かにつけて署名運動がはやる。はやるといいう方はまづいが、しかし何かにつけて署名をさせられるし、することが多い。しかしこれもよく考えてみると、いろいろ疑問がおこる。最近では教科書問題について署名運動を私自身骨折ってみた。まわりの人々を動員して百何人の署名を集めたのだが、さてそこで問題である。

が異口同音に失望の感想を抱いたのが正直のところである。ほとんどの人がまあ言ってみれば、大して関心がないのだ。関心をもつて然るべき人がそんな状態だから、みんながっかりしたというのがいつわざる所なのだ。

これは一体どういうことなのだろうか。何万という署名の人が、特に他の人の集めたのが全部そうだとはいえないが、私の関係した限りではなんとなく、心さびしい思いをしたのである。

しかしこういうように言うのはすこし無理なのかもしれない。問題がむつかしすぎるといふことかもしれない。実際、教科書問題などというのはむつかしいことなのだ。多くの人たちが、文部省にま

かせて国定にした方がよいではないかなどと言うのである。国に関する信頼は絶大なのである。国としては、権力を握っている人々としては誠にありがたいことではないか。

そういう国に対する信頼の強い人々に、国が教科書に口を出すなどという言い草はなかなか通じないのだ。それは日本的伝統というものかもしれない。或いは文化とか、なかならず教育という社会の機能に対する考え方というか、理解というか、そういうことの結果であろうか。そう言えば、我々は社会の問題を考えるという勉強はどうもしなかったようだ。少なくとも義務教育の時代にはなかった。いな教育されたことが、何かすこしピンとがずれていたのではなかったか。

しかしそれは今は言わないことにしよう。だが半数でもそのような考え方の人たち、あまり関心のない人たちが、顔のつながりや知っている人に頼まれたという理由から署名したものが、どれだけの意味があるというのだろうか。現代

は数の時代だと言われる。それで事が処理されてゆくことも確かである。

とくに原発建設賛成か反対かとか、それに関して自治体の首長のリコールとかは端的に数にあらわれる。しかしその場合でも、その数の一つ一つがどれだけの自身のあるものなのかを考えると、これもわからなくなる。しかしそんな理屈を言わないのが、多数決を生み出した現代人の知恵かもしれない。

しかし私はどうもこの現代方式に疑いを抱かざるを得ないようになっているのだ。それをこんどの教科書問題の署名運動でしみじみ感じさせられたような気がする。かりに一千万の人が署名をしたとして、それが果してどういう結果を生むのだろうか。それが権力者、支配層に対する意思表示であり、おどしとなるのかも知れない。権力者はそれを全く無視するというわけにはいかないかも知れないが、しかしそういう力をもっている人たちはもう少しわかるがしこくて、結局は適当に処理されてしまうの

ではないか。

そしてわれわれ民衆は、そんな程度の意思表示しかできないとしたら、民主主義というのはなきげないものだという気がする。

話はそれるが、私もかつて小学校の社会科学の教科書の編集やら執筆にたずさわったことがある。歴史の内容を教科書にに入れることになったときのことだが、なるべく事実を科学的に見てゆく態度をもたせるような歴史の記述にしたいと考えてやったのだが、そこで検査に引っかけたことがある。神武天皇の名前が出ていませんね、ということを言われて教科書会社はどうもそれを入れなくてはいけないようだという事になった。ただこれだけの事だが、私はこれは簡単に見逃せなかった。

私自身、小学校だか中学校だかわすれたが、ジンム、スイゼイ、アンネイ、イトク……という百何十代の天皇の名を暗記して、それを土台にして日本の歴史を学ばされて、後年本当の歴史的な感覚を身につけるために、学校で教えら

れたことを払拭して物を考えるのに大変な苦労をした。そして同年代の人々がいかに誤った考え方をもっているかを未だに痛感している。

そういうように考えると、教育とは恐ろしいものである。私の高校大学時代の仲間、特に学問の世界に入った人は別としても、その常識たるや誠にお寒い限りのものである。それは一般の政治家も同様である。ノンプロもノンプロ、草野球以下であると言ってもよいかもしれない。これでは教科書問題などは到底正常な論議の舞台に乗り得ないのではないか。

といって私は何もいわゆる教育の専門家と称する人、学者と称する人にすべてをまかせるというのではない。ちゃんと文部省という役所があつて、審議会というものも使つて、できるだけ様々な意見が取り入れられるような形式にはなっている。

しかしそれだつて、もっと一般の人が開かれた場所で論議しなければ、とかく怪しげなものになることは、最近の新聞の記事で、官

僚や公社や、それと結びついたさまざまな組織がうまく談合して事を運んでいることは誰も知っていない。国防についても、シベリアンコントロールの原則があるが、そのシベリアンが全くの素人ではとてもものにならない。コントロールにはそれだけの実力があるが、教育にはそれ以上にもっと多くの人が勉強して真剣に論議をする必要があると思うが、今のところ、署名運動、それを通じての運動の展開があまりに力が弱いと思うのである。

これは私も教育を研究する者の一人として反省するのだが、所謂教育学というものが、人々の思想にならないで、ただ大学の単位の科目以上の何物でもないのではなにかと思われる。(暴言多謝)

こういう状態を脱して教育について科学的に考えるということが、一般に普及しなくてはだめだと思ふ。それは普及などということ以上だろう。そもそも教育などというものは全ての親の問題で、子供をどう育てるかということについて

は、うんと真剣に考えてよいことなのだ。教育は国がやってくれるから国にまかせっぱなしでよいなどというのは、明治政府が発足してからつくりあげた思想であり習慣なのだ。それを誰もが当たり前と考へて、子供を育てることにはどんなことがなくてはならぬかを本気になって考へなくなつてしまつた。それが実は最近の校内暴力も生み出しているのである。

教育というのは、教科書を読んでおぼえることだなどという簡単なものではない。教科書に国を愛すること、悪いことをしないこと、一所けんめい働くこと、平和を愛すること、大切な知識等が書いてあつて、それをおぼえることが教育になると考へるのは、ほとんどの人の常識になつてゐる。教科書をおぼえるのが勉強だというのは、明治以来の日本人の通念になつてゐるが、それが日本の教育を墮落させてしまつてゐる。

学習するということは何をすることなのか。自分の目の前にある具体の事実に向かつて行動すること、頭を使つて、全身を使つて働

くことである。字を読むことではなく、社会や人間や事物に向かつて全力を尽すことが人間の力をつける根本である。親も子供も、先生も生徒も本気になって世界の問題、社会の問題、我々の周囲の現実に基づかることの中に人間が育つのである。

そのことを忘れて教科書論だけやっている。墮落しているのだ。出直す必要があるけれども、それがわからない人が多すぎる。明治以来の教育が最善だと思っている人や、教育とはそれ以外にないと思っている人も多い。とにかく余りに教育の科学に素人すぎる人が多すぎる。

そういう土台の上で教科書問題を論じていたり、署名運動的形態で、教育論がまっとうになるだろうか。否、これは日本人が相当本気になって教育のことを研究してゆくことが必要だということではないか。時間もかかりそうだ。そうでなければ、本物の教育は生み出せないのではないか。



事が教育の本質に及んだから、ついでと言っておかしいが、もう一つ述べておこう。教育を受ける、学習をするというのは、日本では自分の将来の地位のためではない。つまり将来の地位のための投資なのだ。教育の中心、学習の中心は個人にとつては、関心や興味の対象でない。そんなことはどうでもよいのだ。学歴が問題なのだ。このことは日本人の思想の問題として重大であると思う。特に教育問題を考えるときには、このことは見逃してはならないことである。

明治以後、日本の教育についての思想が、個人の立身出世と結合して生活の手段としての考え方にずつと寄って行った。本来、東洋の思想というか、日本の思想にあった、学問とか教育を受けるとかいうことを、人間の人生の生き方、人生論、世界観の中で目的論的に考えるとという習慣がなくなつてし

まった。そうでなくて、職業生活の手段を身につけて、生活の安定のために教育を受けるのだ、さらに言えば立身出世のために学校に通うのだという姿勢になつてしまつた。

現在はそれが最もはげしい時代であると言えるかもしれない。受験戦争などという言葉は、そういう社会的思想から生まれたものということが出来よう。よく言われるように、高校まで受験のために一所けんめい勉強して大学に入つて遊んでいる。大学生の話題は遊びばかりだという状態も、そこから生まれていると言えよう。

東洋には、それと全く異なつた学習観が昔からあつた。漫談になるが、中国の禅僧で有名な馬祖という人がいる。(八世紀)この人の師匠の南嶽との修業に関する逸話は面白い。馬祖が座禅をしていると、南嶽が来て何をしているのかと聞く。馬祖は「作仏」、仏になるという字義だが、さとりをひらくために勉強しているという意味である。さとりをひらくために勉強

している、座禅をしていると言つたわけである。

そうすると南嶽が、この人がまた皮肉なおじちゃんらしく、そここころがつっていた瓦を磨き出した。そうすると馬祖が先生に質問する。「先生、瓦を磨いてどうするのですか？」そんなこと聞かなければよいのだが、そこが面白い。南嶽が「これを磨いて球にするのさ」と答える。馬祖が「先生、瓦をいくら磨いても玉になりませんよ」と言わなければよいのによけいなことを言うものだから、そこで南嶽にペシヤンと言われる。「お前の座禅と同じだよ」つまりいくらさとうろうと座禅をしてもだめなんだぞというさとしなのである。

これはなかなか面白い話だがまた難しいともいえる。勉強というのは、今自分の眼前のことに向かつて真剣勝負をすることで、その結果さとうろうとか、利を得ようとかすることでないのだ。そんなつもりでえらくなろうと思つて何かをすればえらくなるなどというものではないのだという教訓なのだ。今その場で真剣に生きている、そ

のことが人間として、結果として成長になるのだということである。さすが馬祖は傑物といわれるだけあって、そこでさとしたというのである。

こんな話は、禅宗の言行録の中にはさらにころがっているが、これは言わば東洋的学習観、教育観かも知れない。こういう考え方は今はすっかりなくなってしまうている。そのことが、教育の内容や方法の発想の仕方、教師の働き方にも大きな影響を与えて、教育を金もうけのための投資というようにしてしまっている。教育がそのためにどのような墮落をしたかとも言い出せばきりがなが、今はこの根本のことだけにしておこう。

日本の教育を立て直すには、私は、学習を目的として考えるという人生観をはっきりさせることだと思う。そういう考え方になるとわれわれのまわりには面白いことが沢山ある。真剣勝負をしたいと思うことがいくらかもある。子供でもそうなるのである。子どもがスポーツをやるときなど、その様子

を見てみると、一切を忘れて目の前のことに没頭している。人間の人生もそういうものである。そう考えると、近代の自然科学でもそれを開拓した人々はすべて、真実を探究しようとして現実に向かつて生命をかけている。それが近代文明を開いたのである。近代文明ばかりでない。およそ文化とはそういう命をかけた人によって開拓されている。今一度それをよみかえらねなければなるまい。

このように考えると、親も子供も教師も今一度、そのときどきの力に応じて真剣勝負をすることを考えるときなのである。私のセンターには、子供がコンピュータとは何かということに真剣にぶつかって面白がって学習するシミュレータが開発されているが、むづかしいと言われるコンピュータも、昔ガリレオが天体を調べていろいろ考えたと同じではないかと私は思っている。そしてちよつと工夫したシミュレータがあればむづかしくもなんともなく、三人ぐらゐのグループで口角泡をとばして研究するのである。それがしか

もとくに成績のよくないと言われる子供たちなのである。

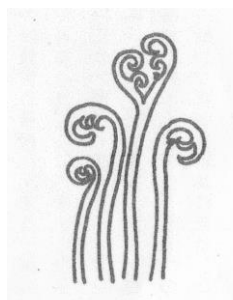
教科書をおぼえてテストを受けるなどという前近代的な学習を考へ直さなくてはならぬ時代が来ているのである。世は技術時代と言われている、子供も大人も面白くぶつかって行ける技術がそこらにころがっているのである。そういうものにもぶつかって行けば、教師も生徒も一緒になって生活できるのである。そういう方向で、ものを考え直してほしいと思うのである。

そしてこれは何もいわゆる自然科学的技術ばかりではない。社会的な事実についても同様な勉強をする事柄はわんざところがっている。アメリカなどで消費者教育などと言って、子供に生活の中で使われるさまざまなものを、その生産から流通のプロセスまでを、具体的なか場でフィールドワークという形で調査研究させることをやっている。子供が大人以上に世の中の経済的仕組みに意見を述べて行動するようになったという例もある。ここでも学習ということの内

容が、明治時代とかわっているのだ。教科書をおぼえるというのは教育にならないのだ。そういう点からも教育を考へ直して教科書も位置づける見識を皆に持つてもらいたい。

こう考えると教科書問題を発端にして、日本人たちがみんな時代の国民をどう育てるか、あらためて考え直す時代が来ているように思うのだがどうだろうか。

教科書署名運動のようなものが発端になって、日本人の教育思想が近代的に、科学的になってほしい。教科書などというものは人々のつくるものだと思うのだが、残念ながらわれわれにまだそこまでの力がないのが実情だと思われるのである。



◆視覚◆

「住宅の問題、高齢化社会の問題、このような現実の問題について、彼らは何故一つとして口にしないのだろうか。」

戦後日本の民主化の実態をえがいて有名な「ニッポン日記」のマーク・ゲイン氏が、「新ニッポン日記」のための取材活動で、リーダー、ニューリーダーと言われる政治家、また財界のトップに、これからの日本の課題やリーダーシップについてインタビューをしての感想である。そして、明日の日本のリーダー

を育てんとする政経塾を評しては、「朝掃除をすること」（掃除とマラソンが塾の日課である）と「人の話を聞くこと」（講師陣はガルブレイス氏ら各国一流の学者）で、リーダーシップが育てられるだろうか。かれらに必要なのは、現実の問題の中で苦しみ悩み行動することだ」と。

現実の中にこそ問題があるので、教科書の記述の中にあるのではない。教科書問題を考えるとき、このことを忘れるまい。

(ABC)

*編集部注

右の「視覚」は、「教科書問題とは何なのか」の論考が書かれた誌面の一角に、ABCの筆名で教科書問題を考える姿勢について述べた一文。